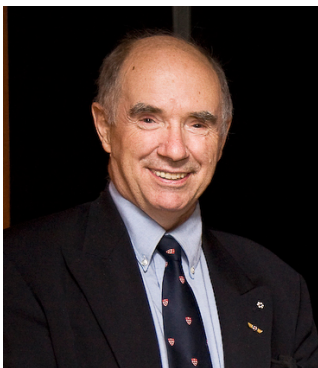


### ひとこと概要

章全体を通して、学校で教えられる歴史は退屈で、生徒を魅了できていないことを論じている。前半では、カナダにおける歴史を教えることや、学ぶことに関する（政治的）論争（特にケベック独立問題との関連）が記されている。後半では、政治的論争が起きているカナダにおける「歴史的思考（historical thinking）」の意義が書かれている。

## 0、著者について

### Desmond Morton



\* 本著の著者一覧から

McGill（ケベック州、モントリオール）の Institute for the Study of Canada  
の指導主事

トロント大学の歴史教授

カナダの政治史、軍事史、労働関係史に関する 33 の著者ならびに共著者

\* McGill REPORTER<sup>1</sup>から

“Aspirational Standard for Canadian Studies”を設計したことで敬意を表される歴史家

一般の人々の経験、特に労働者や兵士の経験に引きつけられ、彼らの立場からカナダの歴史を書き直したことで知られる。

## 1、用語

historical understanding・・・歴史理解

recognition history・・・歴史の認知？

## 2、本文要約

### *An Ignorance of History Facts*

・ 1997 年、Canada Day（7月1日）に関して行われて世論調査（18-24歳の1104人のカナダ人）

→彼らがカナダの歴史に無知であるという誠に嘆かわしい結果（例：ようやく半分が初代首相の名前が言えた）

→こうした結果への不安視（viewing with alarm）や、かなり悪用された公立学校システムの改善要求が生じる

・ Daniel Gardner（オタワの市民のための保守的な論説委員）：歴史的事実に関する知識は、共通の文化的遺産の一部であると強く主張したが、それらは歴史理解を構成していないことを認めた

→それらの要因は、カナダの4つの州でカリキュラムから歴史が消えたり、残っている州でも歴史の割合は乏し

<sup>1</sup><http://publications.mcgill.ca/reporter/2017/09/a-tribute-to-mcgill-historian-desmond-morton-on-his-80th-birthday/> 最終閲覧：2018年5月31日

かったりすることにある。

\*カナダを通して、社会科が歴史に取って代わられている。

→Gardner、Rudyard Griffiths（自治協会（Dominion Institute）の若い局長）は、より深い歴史的理解の基礎となる“National History Framework”や、カナダの学校で教育を受ける全ての子どもに導入すべき人物や出来事のみニマムリストを開発することが問題解決のための答えであるとした。

### *Viewing with Alarm*

・自治協会のクイズは、ブルームタキノミーの最も低次の問いであり、公式回答のうち2つは不正確であったことから、歴史家や教師のほとんどは、それらを退けていた。

しかし、歴史を教えることは、大抵自治協会が枠付けた用語に関してすぐに問題になった。

例：退役軍人を中心とする市民の抗議行動に直面して、マニトバの保守的な政府は、歴史の教科を廃止する計画を打ち切った。

### 専門家（歴史家）による論争

J.R.Miller（カナダ歴史協会）は専門家としての歴史家がこうした論争の傍観者であり、議論を無視していることを批判

→J.L.Granatstein（トロントヨーク大学を近年退職した） “Who Killed Canadian History?”

殺人犯は、政治家、官僚、彼の前の大学の多くの同僚、特に社会史家、フェミニスト史家、多文化歴史家であるとし、政治的、軍事的、外交的トピックを無視することで、彼らは生徒を混乱させ、判断を誤らせ、ほとんどの生徒を退屈にさせている。

### ケベック州における論争

著名な歴史家主導の専門委員会のレポートに続いて、教育相である Pauline Marios は歴史にかける時間を倍増し、歴史の学習を全学年に広げた。

→政治的反応は二分した 例：独立主義反対派からの批判や「単に分離主義を助長するだけ」(Monique Nemni)

・英語州の教科書は、フランス系カナダ人の歴史を確かに含んでいるが、結果として国家の理解につながっていないだろう。

+英語州におけるケベックの描かれ方の問題

ケベックの人々は、対立よりも同情的なステレオタイプを英語を話すカナダ人に持っているが、ケベック人が「英語者」よりも軽率で偽善的であり、無知で愛国心がなく心が狭く、現実的でないように思われるのは、なぜだろう？

→1つの答えを、歴史の教科書の中に見つけることができる。(イギリス人入植者が、民主主義や商業、進歩をもたらすまで、封建領主や聖職者に支配されていた、陽気で子供のような住民の記述) (Daniel Francis)

### *History Wars a Canadian Spin*

・カナダは、同市民の歴史意識の程度に関して幾つかの懸念理由がある。 例：1990年代のケベック独立問題

→カナダの歴史の適切な教授がケベックの人々の不忠実さを植え付けたのだろうか？

・ケベックやカナダに関する義務科目では、少数民族としてのフランス系カナダ人の地位や、平等の権利に関す

る、またはカナダに対する終わりなき戦いが強調されている。

\*一方で、ケベックの外では、ケベックに関する歴史への関心は薄い

「歴史は順応や和解に従属するカナダの取り扱い説明書である」

→ケベックとカナダの独立に関する議論は、必然的に歴史的になる。

### *Ten or More Histories to Teach*

・カナダにおいて、教育は依然として州の管轄である。

・市民を形成する道具として、公教育は19世紀の発明品であり、歴史はその最たるものであった。

→英語州では、ナショナルアイデンティティは主にイギリスであった。1066年、1214年など

・1920年代、学校においてカナダ独自の歴史が出現し、卒業生は、探検者や開拓者に焦点が当たられ、近現代は慎重に避けられた歴史を思い出す。

→プログラムは政治性を帯びていた

例：ブリティッシュコロンビアは最初のカナダ史の教科書を禁止し、W.L.Grantはあえて、戦費に反対する「非イギリス」としてのケベックをあえて描いた。

→全ての州は歴史や社会科を教える事の政治的、共同体的統制の伝統を維持し続けている。

・1960年代以前、ケベックにおける歴史は、帝国の愚行と英語話者の偏見から生き残るためのフランス系カナダ人の苦闘に焦点を当てた

→今日に至るまで、英語話者とケベックの生徒間の5月24日の祝日の祝い方は異なる

### *Was It Better in the Past?*

・特別な教師は生徒に刺激を与えているが、用心深い教師や、能力の劣った教師は、黑板をノートに写させたり、試験問題を予想したドリルを行ったりと昔から続く方略を用いて、トラブルを避けている。

・多くのカナダ人は、歴史は、公式に真実と認められた「科学的」で、完全に客観的なものであると信じている。

→しかし、バイリンガリズムとバイカルチャリズムに関する連邦の王室委員会 (Royal Commission) は、英語話者とフランス語話者に教えられる歴史はかなり異なる型であることを発見したことに衝撃を受けた。

・カナダは「バイカルチャル」ではなく「マルチカルチャル」であったという主張は1972年に連邦政府 (Ottawa) によって正式に受け入れられ、フランス語話者がごく一部の少数派であるいくつかの西部の州ではずっと早くから認められていた。

しかし、ケベックの外では、バイリンガリズムが正式な指針であり、多文化主義は、ウクライナ人、ポーランド人、ドイツ人、ネイティブの記憶をアングロ系の文化に合わせるように押し込む伝統的な試みに相容れない。

→多様な視点を盛り込むことや、「歴史の認知 (recognition history) の退屈さに直面して、多くの教育局は「社会科」のなかに安全を求める

### *In the Present*

・多くの歴史教師同様に、自治協会は社会科の流行を遺憾に思っており、その動機は愛国心である。

→歴史の学習は愛国的なシティズンシップを教え込むことなのか？

答えは複雑である。1960代のケベック独立運動を起こした世代は、1940年代、50年代にキリスト教学校修士会会員 (Christian Brother) によって教育されている。

また、学校の役割は如何に重要か？

→私たちが過去を理解するのは、教室だけではなく、主として教室でもない。

教室における過去はほとんどリアルではない。

### *Cultivating Historical Understanding*

・歴史を通して、生徒は「歴史理解」を学ぶことができる

「歴史理解」・・・因果関係や順序付け、関係付けの基礎であり、「遺産」と呼ばれるダイヤモンドや安物の宝石で出来たカワサギの巣から、「歴史」を厳格に知的に区別する

・歴史の学習は必ずしも学校内で起きるわけではないが、組織的で十分に情報を与えられた歴史の学習でのみ、西側陣営の条約締結における悲惨なディレンマや、豊かな家族の銀製食器の意味や 1939 年にカナダ軍に参加することの社会的文脈を発見することができる。また、歴史がなければ、たくさんの記憶をもっている、記憶を私たちが経験と呼ぶ論理的様式に変換するツールを失う。

→私たちの過去に知的な学問規範を適応することは、若者の頭に選ばれたデータや事実を詰め込む義務ではなく、学校の歴史が復活する最良の事例を提供する

### *Is This What History Teachers Understand?*

「歴史理解」はカナダの教室に置いて多くの歴史教師の実用的な目標か？

→文明化された人間や関係する市民には価値があるものの、「歴史的に考えること」は、洗練されたコンセプトであり、専門的な訓練、洞察、時間を要する。

\*カナダのほとんどの州では、教員養成は教育学部内で求められる専門課程が好まれている。

一方で、学校の歴史の需要は高まっているが、数百の事実を暗記させることは、若者が自由に「歴史を読み、その上で歴史をつくる」ということを確信させない。

(現在のカリキュラムは文脈や出来事の配列 (chronology) に意義に賛同し、「歴史的思考」の挑戦にも言及しているが、テーマや問題、概念が支配的である。)

→新しい、クリティカルなスタイルは現在、または未来の教師のほんの少数が実現できる準備やコミットメントを必要とする。

しかし、そのような訓練がなければ、過去は Lowenthal が雄弁にそして理にかなって嘆き悲しんだ「遺産」の一種として、原材料のままである

### **3、議題**

多民族、多文化国家カナダにおける「歴史理解」や「歴史的思考」の意義と課題

→歴史が複雑な国家や地域において、歴史理解や歴史的思考を用いた歴史授業は、生徒を引きつけるものになるのか (この章内には積極的な理由があまり見られなかったが) ？

→テーマや問題選択に重きが置かれ過ぎるのは問題だが、一方でテーマや問題選択が、生徒の学びを刺激する上で重要ではないか？

→学校外の歴史も踏まえて議論する際に、「歴史」対「遺産」、つまり「学問対世俗」という対抗軸でいいのか